

国語科教育における俳句指導についての提言：
高等学校の現代文を例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 有美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4618

国語科教育における俳句指導についての提言

—高等学校の現代文を例に—

木村 有美子

要旨

現行の高等学校学習指導要領（二〇〇九年三月改訂）では、「生きる力」の育成をめざして「我が国の伝統と文化、とりわけ言語文化に対する理解を深めること」また、「書くこと」の「言語活動」として「創作」を国語科の学習目標の一つとして掲げている。我が国伝統の「世界で最も短い定型詩」である俳句は、国語科教育の中でどのように位置づけられているのだろうか。高等学校における実態を踏まえた上で、高校生に興味を持たせ、創作に導く具体的な俳句の指導法を提言する。

キーワード…国語科教育 言語文化 俳句 創作活動 指導法

はじめに

毎年、教師をめざす学生たちに、中高の現代文の教材で印象に残っているものを尋ねるのだが、短歌や俳句といった韻文教材が挙がることは皆無に近い。生徒たちにとって、韻文教材はどのようなものとして受けとめられているのであろうか。本稿では高等学校の俳句に絞って、従来の授業の実態と教科書での取り上げ方を調査した上で、俳句の魅力を伝え、生徒に興味を持たせ、創作活動に導くはどうしたらいいか、具体的な方法を提案したいと思う。

一、高等学校における俳句の授業

筆者の授業の受講生（大学二・四回生）七〇名にアンケートを実施、高等学校の俳句の授業で学習した内容を調査した。データ数が

少ないので信憑性は高くないが、大まかな傾向は把握できよう。学習したという回答の多かったものから列挙する。右はその回答率である。(%)に関しては、見やすさを考慮して算用数字を用いて表示する。)

まずは俳句についての基本的な知識に関するものについて、

- 基本的に五七五の一七音から成る。(定型) 100%
 - 字余り・字足らずの場合もある。 100%
 - 定型にとられない自由律の句もある。 97%
 - 基本的に一句に一つの季語を入れる。 94%
 - 季語とは何か。(季語の意味) 94%
 - 「切れ字」(や・かな・けり等)の効果。 82%
 - 「切れ」の意味や効果。 67%
 - 季語の効果。 52%
 - 季語を用いない無季の句もある。 41%
 - 一句に季語が二つ以上入るものを「季重なり」と呼ぶ。 26%
 - 五七五の各部分を「上五」「中七」「下五」と呼ぶ。 14%
 - 五七五の一七文字は続けて縦書きに書く。 8%
- という結果となった。一句に一季語という基本事項が100%ではなかったこと、季語の意味は知っていても、それがどのような効果を生むかについての認識が低いことは教師側の反省点にもなりそうである。無季の句について認知度が低いのは、教科書に採用される句にもよ

るのであろう。俳句の各部の名称や「季重なり」と言う語は専門的な事柄で必ず学習すべきこととも思えないが、俳句の正しい表記の仕方(五七五の各部の間を空けたり、三行に分ち書きにしたりはしない。)は教えておきたい。また俳句の成立史、俳句の変遷については8%、11%と、ともに低い回答率であった。

更に、授業の進め方についても尋ねてみた。名句の鑑賞は88%、俳人の業績・履歴の紹介については32%であったが、どちらも教師による解説が中心であったようだ。生徒自身が俳句を創作した、という回答は58%であったが、創作した句の生徒同士の批評・評価は26%、教師による添削や評価を受けたのは23%と低かった。生徒にとっては俳句の学習は、教師による解説をきいて鑑賞するものという印象が強いのではないだろうか。

学習後どのように復習、試験対策を行ったか、については、

- 俳句中の季語が示す季節、句切れ、切れ字の確認。 97%
- 俳句から読みとれる状況・背景の確認。 85%
- 俳句と作者名との確認。 73%
- 俳句自体を暗唱。 32%

であった。中には、俳句は試験範囲に入っていなかった、学習後全く復習した記憶がない、といった回答もあった。

アンケートの最後に現時点の俳句についての印象を尋ねた。「鑑賞するのは好き」と答えた学生が91%、「創ってみたい」が14%いたことは、指導の仕方次第で俳句の魅力を伝えられるのでは、という期待を持たせてくれる。もっとも、「全く興味がない」も8%い

前回の 順位	俳人名	今回の 順位	俳人名
1	高浜虚子	1	高浜虚子
2	山口誓子	2	中村草田男
3	中村草田男	3	山口誓子
4	加藤楸邨	4	種田山頭火
5	水原秋桜子	5	正岡子規
6	正岡子規	6	水原秋桜子
7	種田山頭火	7	加藤楸邨
8	飯田蛇笏	8	飯田蛇笏
9	石田波郷	9	橋本多佳子
10	村上鬼城	10	尾崎放哉
11	川端茅舎	11	金子兜太
12	中村汀女	12	西東三鬼
13	河東碧梧桐	13	村上鬼城
14	飯田龍太	14	石田波郷
15	杉山久女	15	杉山久女
16	西東三鬼	16	鷹羽狩行
17	尾崎放哉	16	坪内稔典
18	高野素十	18	篠原鳳作
19	橋本多佳子	19	黛まどか
20	金子兜太	20	中村汀女

籠昏ければ揺り灸えたとす」は以前から取り上げられていた句だが四社が採り、全二五句で前回の一九位から九位となった。今回特に注目すべきは、金子兜太、鷹羽狩行、坪内稔典、黛まどかといった現在活躍中の俳人が多数ランクインしていることである。この中で最も若い黛まどか（一九六二年生まれ）は五社、七種の一二句が採られている。「交換日記少し余して卒業す」「旅終へてよりB面の夏

休」「待ちし一枚その中にあり年賀状」等、高校生の感性にも響くだろう句が多い。この傾向は上位二十位だけではなく、今回の収録句に全般に言えることである。取り上げられる俳人の世代交代と言っ

ていいだろう。取り上げられた多さを俳句別に集計したのが、左の表である。中村草田男の取り合わせの名句「万緑の中や吾子の歯生え初むる」が

一位、高浜虚子の「白牡丹といふといへども紅ほのか」が二位であるのは前回と同じである。取り上げられている句に前回と重なるものが多い中、今回新たに、金子兜太の「彎曲し火傷し爆心地の馬拉ソン」が三位に、篠原鳳作の「しんしんと肺碧きまで海の花び」が六位、橋本多佳子の「雪はげし抱かれて息のつまりしこと」が七位に入って居ることは注目すべきであらう。

出版社別に言えば、最も積極的に現代の俳人の句を取り上げているのが三省堂である。『精選国語総合改訂版』では「今日の俳句」

俳人名	掲載句	掲載数
中村草田男	万緑の中や吾子の菌生え初むる	19
高浜虚子	白牡丹といふといへども紅ほのか	14
種田山頭火	分け入つても分け入つても青い山	14
種田山頭火	うしろすがたのしぐれていくか	12
飯田蛇笏	芋の露遠山影を正しうす	12
金子兜太	彎曲し火傷し爆心地のマラソン	12
正岡子規	いくたびも雪の深さを尋ねけり	11
村上鬼城	冬蜂の死にどころなく歩きけり	11
尾崎放哉	咳をしても一人	11
山口誓子	海に出て木枯帰るところなし	10
正岡子規	糸瓜咲きて痰のつまりし仏かな	9
杉山久女	舒して山ほととぎすほしいまま	9
西東三鬼	水枕ガバリと寒い冬がある	9
篠原鳳作	しんしんと肺碧きまで海のため	9
正岡子規	鶏頭の十四五本もありぬべし	8
加藤楸邨	鱧の骨まで凍ててぶちきらる	8
水原秋櫻子	滝落ちて群青世界とどろけり	8
水原秋櫻子	啄木鳥や落ち葉をいそぐ牧の木々	8
杉山久女	花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ	8
橋本鷹女	雪はげし抱かれて息のつまりしこと	8

として、坪内稔典「たんぼぼのぼぼのあたりが火事ですよ」、長谷川權「春の水とは滞れてゐるみづのこと」、小澤實「ゆたんぼのぶりきのなみのあはれかな」、夏石番矢「未来より滝を吹き割る風きたる」、黛まどか「夜桜やひとつ庭に恋仇敵」の五句を挙げている。『明解国語総合改訂版』では、大高翔「笑いあう春のオルガンひくように」、浦川聡子「クロイツェル・ソナタ折り鶴凍る夜」、鎌倉佐

七二年生まれ、山口は俳句甲子園で活躍した一九八二年生まれ、おそらく教科書に採用された句の作者として最年少であろう。第一学習社は、『改訂版新編現代文A』『改訂版現代文B』に、皆吉司「小春日や隣家の犬の名はピカソ」、坪内稔典「十月の木に猫がいた大阪は」、大西泰代「恋文を開く速さで蝶が湧く」、長谷川權「湯に立ちて赤子あゆめり山桜」の四句を、筑摩書房は『精選国語

弓「芒すすき光を生んで枯れている」を採っている。『改訂版現代文B』では正木ゆう子「揚雲雀空のまん中ここよここよ」、小澤實「子燕のこぼれむばかりこぼれざる」、千葉皓史「裸子がわれの裸をよろこべり」、田中裕明「宿の子の寝そべる秋の積木かな」を、『精選現代文B』では上記、正木、小澤の句に加えて西村和子「虫籠に虫るる軽さぬ軽さ」、田中裕明「長夕焼旅で書く文余白なし」も採られている。更に『明解改訂版現代文B』では、西村和子「泣きやみておたまじやくしのやうな眼よ」、長嶋有「うつぶせで開くノートの先に海」、山口優夢「てのひらもあうらもキャンプ帰りかな」、石田郷子「背泳ぎの空のだんだんおそろしく」を採っているが、長嶋は「猛スピードで母は」で芥川賞を受賞した一九

総合」に「現代の句」として、長谷川權「冬深し柱の中の濤の音」前記小澤の「子燕」の句、田中裕明「みづうみのみなとのなつのみじかけれ」の三句を、『現代文B改訂版』には、夏石番矢「千年の留守に瀑布を掛けておく」「神々のあくびが桜を枯らすのか」の二句を採っている。平生俳句に接する機会の少ない高校生にとって、教科書は俳句への興味を喚起する入口である。それを考えれば、平成生まれの生徒たちが、一読して共感できる現代俳句の掲載は歓迎すべきものではないだろうか。

また、筑摩書房は『現代文B改訂版』に、高柳重信「軍鼓鳴り／荒涼と／秋の／痣となる」「樹々ら／いま／切株となる／笹かな」(本来は／の箇所を改行、四行に分かち書きで表記される。)を、同じく桐原書店も『新探求国語総合 現代文・表現編』に高柳重信「降る雪の／かなた／蠟燭の／輪の／舞踏／靴」を採っている。この多行形式の句を採用しているのは、右の二社のみである。こういう形式の句があることを示すことも教科書の役割の一つかもしれない。

その他、明治図書は『新国語総合』『新精選国語総合』に、「俳句の窓」の頁を設け、(近代俳句において、俳句一筋に創作した俳人がいる一方で、俳句独特の表現によって文字活動を豊かにした小説家・詩人・評論家)もいた、その俳句は(個々の作家の特徴)を示した魅力あるものだとして森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介、室生犀星、久保田万太郎、佐藤春夫、吉屋信子、瀬戸内寂聴の八名の句を

紹介している。これも面白い試みであろう。以上、教科書に採用された句について、特記すべき特徴についてのみ言及した。

次に、以前の教科書との大きな相違点として挙げたいのが、俳句の鑑賞・解説文の扱いである。以前は俳人・評論家による鑑賞・解説文が作品とともに収録されていたが、今回調査して驚いたのは、鑑賞文を掲載している出版社は四社(教育出版、大修館書店、明治図書、第一学習社)のみ、その執筆者は大岡信一人であったことである。全社「折々のうた」からの抜粋である。「折々のうた」は一九七九年一月二五日に始まり、休載を挟みながら二〇〇七年三月三一日まで、六七六二回に亘って連載された(日本文学史上に残る詩歌アンソロジー)とも呼んでいいもので、的を射た批評・鑑賞、分かりやすく程良い長さの文章が教科書には最適だったからだと思う。鑑賞や批評が掲載されなくなった背景には、生徒の自由な読みを制限する、という意見があるからであろう。だとしたら、生徒の自由な読み取りを伸ばす工夫を、教師は模索しなければならぬ。

今回教科書を調査して、気になったことの一つが、教材となる俳句をどのように提示しているか、である。同じ作者の句を二〜三句並べるか、一句ずつ多くの俳人の作を紹介するか、教科書の編集者も頭を悩ませる点であろう。また、テーマを掲げて、同じテーマを詠んだ異なる作者の句を三〜四句ずつ並べる方式を採用している教科

書もある。東京書籍、三省堂、数研出版、筑摩書房、第一学習社が一種以上の教科書で、このテーマ方式を採用している。この中で、第一学習社は他の出版社にはない編集を行っている。それは、「犬」「猫」「蝶」「走る・歩く」「飲む・食う」というテーマ別に短歌と俳句を並べて掲載していることである。短歌と俳句では表現のめざすところが異なっている。その違いを生徒に指導できるなら、こういう編集も面白いかもしれない。

もう一つは、俳句の表記についてである。尾崎放哉の「咳をしても一人」を五社はこのように表記しているが、三省堂と桐原書店は「せきをしてもひとり」と平仮名で表記。加藤楸邨の「鯨鯨の骨まで凍ててぶちぎらる」は四社がこのように表記、第一学習社のみ「ぶち切らる」と漢字を用いて表記。村上鬼城の「冬蜂の死にどころなく歩きけり」は五社がこのように表記、筑摩書房のみが「死に所なく歩行きけり」と、「歩行」に「ある」とルビを付けて表記している。篠原鳳作の「しんしんと肺岩きまで海の花び」は三社がこのように表記、数研出版と第一学習社が「海の旅」と漢字を用いて表記している。ルビについても、金子兜太の「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」の「火傷」を、七社が「かしょう」とする中、筑摩書房のみ「やけど」とルビを付けている。「わんきょく」という上五の読みを考えれば、こは「かしょう」と読みたいところである。一七音しかない俳句においては、表記はその句の表現する世界に大きく影響する。作者の意図を損ねることのない表記であるべきだろう。³⁾

最後に、各教科書が挙げている「学習の手引き」「設問」について述べたい。結論から言えば、各社、各教科書間の差異は殆ど見られなかったということである。多くが挙げていた項目を次に挙げる。

- ・句切れ、切れ字に（あるいは間の取り方）・リズムに注意して（緩急をつけて）（何度も）音読（朗読）しよう。
 - ・俳句の表現上の約束・技法を確認しよう。
 - ・季語とその季節を（歳時記で）確認し、効果を考えよう。
 - ・切れ字を指摘し、その効果について考えよう。
 - ・表現されている情景、感動の中心はどこか考えよう。
 - ・表現の工夫はどこにあるか、説明しよう。
 - ・印象に残った句について、鑑賞文（感想文）を二〇〇〜四〇〇字で書こう。
 - ・（テーマを掲げている教科書では）同じテーマの一組を選んで（比較して）各々の句の特長（共通点・相違点）を説明しよう。
- あるいは感想を書こう。
- ・俳句を作ってみよう。（クラスで句会を開こう。）

中には、句中の一語を取り上げ作者の捉え方を問う、句切れの位置が同じ句を挙げ共通点を、定型と自由律の句を挙げ相違点を問う、といった設問を挙げている教科書もあったが、少数であった。句の暗唱を薦めているのは明治図書と第一学習社の二社、一句を取り上げ、鑑賞文を書き、それを発表して討議する、あるいは句を創作し、どのような情景を詠んだのかを自分で説明するのを提唱しているの

は、筑摩書房のみであった。また、大修館書店の『精選国語総合新訂版』は、「俳句の修辭」として、切れ字・切れ・自由律・取り合わせ・一物仕立てについて解説、教科書の俳句について、これらの表現技法を指摘してみよう、という課題を付している。更に、筑摩書房と大修館書房は、関心を持った俳人の他の作品や作風について調べ、発表するという発展的な課題も挙げている。

筑摩書房の『精選国語総合 現代文編』では、「羅針盤」と題した解説が各単元の間に設けられているが、詩歌の単元では歌人俳人の紹介の後に、一頁を割いて「伝統的定型詩の現代—短歌・俳句」という文章を置いている。なぜ五音七音の定型詩が現代まで生き延びたか、俳句はどのように成立したか、季語・切れ字の効能や限られた音数に凝縮されたために生じる解釈の幅など、作者と鑑賞者との関係にまで言及。高校生にはぜひ一読を薦めたい一文である。同社の『国語総合改訂版』『現代文B改訂版』には、「読解の窓」と題した項があり、「近代俳句」について半頁ほどの分量だが、俳句の成立、子規の写生の説を紹介、漱石・芥川への影響、俳句のルール、海外でのハイクにも触れている。

その他、ユニークな取り組みとしては、教育出版社の『国語総合』『精選国語総合』での「句会を開いてみよう」がある。どのように句会を開くか、その手順が一頁にまとめられている。大修館書店の『新編国語総合 改訂版』では「アンソロジーを作ろう」の見出しのもと、グループで、詩歌をある基準で選び編集し「アンソロジー」

を作る具体的な手順を紹介、作品例も含めて三頁で紹介している。ここではテーマを決めて、詩歌全般から作品を選んでいるが、俳句の授業にも活用できるであろう。一方、明治図書『新現代文B』『新精選現代文B』では、後見返しの部分に「創作への導き 発見と言葉の響き合い」という見出しのもと、数葉の写真を掲載、写真から俳句を作る手順と作品例を挙げている。インスタグラム等で撮影に慣れている現代の生徒たちには、いい方法であろう。後節でも取り上げたい。

東京書籍は『新編国語総合』で俳句二二句の後に「俳句の読み方」を「情景の背後に隠れる心」「季語のおもしろさ」の項を挙げ一頁を割いているが、具体性に乏しい憾みがある。また、第一学習社は『改訂版新編現代文A』『改訂版現代文B』『改訂版標準現代文B』に「言語活動」という項目を設け、その中に「創作の楽しみ・短歌と俳句」という文章を載せている。〈暗唱できるまで読んでリズムを身体で覚えよ〉〈切れ字を意識して〉読めば、ヘリズムが一種類ではなく、無限のバリエーションがあることがわかる。〈自分のものにするまでが難しい〉が、へそを乗り越えれば、未知の楽しみと出会える。と〈鑑賞とは一味違った楽しみ〉が味わえる創作を薦めている。が、書かれている内容は、音読してリズムを体得する、ということだけである。確かに、俳句において調べ・リズムは重要な要素の一つであり、音読はそれを感得する有効な手段だが、はたして、これだけで俳句を創れるようになる生徒が何人いるのだろうか。「創作の楽しみ」と題するだけの内容を伴っているとは思えない

い。

現行の高等学校学習指導要領（平成二十二年三月改訂、平成二十五年
度入学生から実施）では、「我が国の伝統と文化、とりわけ言語文
化に対する理解を深める」ことを目標に掲げ、「書くこと」の「言
語活動」として「文学的な文章を創作する」ことが加えられている。
多くの教科書の「学習の手引き」に俳句の創作が挙げられているの
も頷ける。だが、作句の経験のない教師には少々ハードルが高いの
ではなからうか。

三、俳句の授業についての提言

—俳句指導において、右の学習指導要領の掲げる目標を達
成するためには、どのような授業を行えばいいのだろうか
か？ この節では、具体的な方法を提示したい。

① 俳句に対する共感の喚起 — 同世代の俳句の紹介

高校生にとって、俳句は「古臭い」「色々ルールがあって難しそ
う」「興味が持てない」ものであるようだ。まずはこうした負のイ
メージを払拭し、共感を抱かせる必要がある。そうするには、教科
書に載っている限られた俳句を読ませるだけでは限界があるだろう。
前節で述べたように、今回の改訂で教科書の俳句は若返り、現在活
躍している俳人の作品が多く採られるようになってはきたが、生徒

と同世代の作品をもっと紹介したいものである。

現在、高校生が俳句を投稿できる機会は多くある。全国規模で展
開される「俳句甲子園」をはじめ、神奈川大学が募集する「全国高
校生俳句大賞」、飲料メーカー伊藤園が募集する「おいのお茶新俳
句」、龍谷大学が募集する「青春俳句大賞」等があり、優秀作を集
めたものが書籍化されている。優秀作はインターネットでも検索で
きる。また、児童・生徒に俳句指導を行っている指導者による中高
生の作品を収録した書籍も数多く出ている。こういったものを利用
すれば、授業で同世代の作品を紹介することはそんなに難しくはな
い。

一例として、今井聖氏の『部活で俳句』（岩波ジュニア文庫 二
〇一二年八月 岩波書店）を挙げておきたい。高校生の日常（受験・
部活といった学校生活や家庭での生活）に根差した作品が収録され
ている。

- ・ 面付けて微臭き視野立ち上がる
（今泉邦彦）
- ・ 背負い投げ決まる真夏の青畳
（立石江介）
- ・ 蝉の声ピリオド強めに英作文
（鈴木亜季）
- ・ 秋の虹母に一言嘘をつく
（山本美星子）
- ・ 何気なくあの子の上履き見て帰る
（森岡貴志）
- ・ ストロウを使わぬ君の喉の汗
（藤野仁美）

今井氏は〈奇なる事美〉は日常のあらゆる時間時空の中に起こっ
ている。それに気づくことは至難のわざだという。〈先入観にと
らわれず、日常の中に「詩」を見出す〉こと、〈平凡から非凡をつ

かみ取る) ことの重要性を説いている。

もう一例、高校生の俳句を紹介しておく。こちらは、大岡信氏の「折々のうた」に取り上げられたものである。大岡氏は平成一六年八月六日から八月二〇日まで、一三回に亘って神奈川県大学の『17音の青春』(二六年刊)に収められた句を紹介している。

句の後の()で示した文が大岡氏の評である。

・ドロップのふたの開かない暑さかな (愛知県幸田高校)

二年 竹岡佐緒理)

〈何の変哲もない日常生活の一こまが、五七五にする

「言葉」になる不思議。作者は何回も応募、「向日葵に背中押されてサーブ打つ」などがある。〉最優秀賞。

・秋の夜暗い廊下が見える席 (沖縄県泊高校定時制二年)

下田秀美)

〈指導者が生徒に要所だけ教えて、あとはのびのびと作らせる骨を心得ているのだろう。初心者はいい指導者を得るのが肝心。指導者の資格ははめ上手であること。下田さんのこの句は、何となく続きがありそうな所で終わっている呼吸が面白い。言い切る呼吸も大切だが。〉最優秀賞。

・不器用が服着て歩く十六歳 (神奈川県大付属高校一年)

土屋健太)

〈おそらく自画像だろうが、読む人を思わずにやりとさせられるおかしみがある。外部の人間に自分がどう見えているかを知っていて、それを真っ向から否定できないことも知っ

ている青春。入選作だが、最優秀賞に推してもよかった者だと思ふ。別の作に「油蟬が死にかけているアスファルト」というのが有るが、熱したアスファルトの感触を、よくつかんでいる。〉入選。

・夕立よこの惑星を浄化せよ (青森県三本木高校二年)

笹山康崇)

〈「この惑星を浄化せよ」と命令形を用いて、心の願いをのべているが、こういう大きく構えた俳句は『17音の青春』全体の中でも他に見られなかった。高校生の作品としては、こういう内容の句は当然ありうべきものだろう。ただ、命令形で終わる句は、大きな身振りに陥るだけである危険性もある。右の句は「夕立」で成功しているが。〉入選。

この同世代の作品を取り上げるねらいの一つは、勿論共感を呼ぶ素材の提供であるが、もう一つは同世代の言葉から刺激を受けることである。前節の大修館書店の「アンソロジー」を作らせる試み(『新編国語総合 改訂版』を、同世代の俳句に絞り、生徒自身に素材集めをさせてみるのも面白いかもしれない。

② 俳句の面白さの感得—どのような句が良い句なのか？

高等学校での俳句の授業を面白くするには、生徒の共感を呼ぶ身近な教材を提供すれば、それで済むというわけではない。それは興

味を持たせるための入り口にすぎないからである。やはり、定評のある秀句を分析、その表現の工夫を理解し、詠み込まれた情景や心情を把握させなければならぬ。そのために、前節に挙げた「学習の手引き」にあるような項目を生徒に考えさせることになる。ただ、教科書に載っている俳句について生徒は教師の解説を聞いて表現の巧みさや情景・心情を理解できたとしても、他の俳句の鑑賞や自らの創作に、それを応用できるだろうか。藤井圀彦氏は、俳句の授業の多くが、個々の句を取り上げ読解・鑑賞させる（従来の読解指導過程を、俳句に応用）しただけの（俳句を教える）授業になっている、と指摘。俳句の持つ味（文芸性）を感得させるには、多くの教材を用意し、比較させながら読ませるといふ手法が効果的だと述べている。¹³

⑦ 比較して読ませる俳句

この比較して読ませる授業のヒントを、東京都小平市立小平小学校教諭 溝越勇人氏が与えてくれている。溝越氏の授業は小学六年生を対象としたもので、教材も小学生向けのものであるが、俳句の面白さを児童に伝える工夫がある。以下にその授業から比較して考えさせる部分を抜粋して紹介したい。まず、春、夏、冬の句が書かれた三色のカードを二枚ずつ、黒板に裏返しに貼る。二枚のうち一枚は伊藤園の「おいお茶新俳句」の子どもの部の入賞作品、もう一枚はニセ物である。その中身は次のとおり。

- | | | |
|---|---|-----------------|
| 春 | A | タンポポの暖かい色気持ちいい |
| | B | タンポポの暖かい色寝てしまおう |
| 夏 | A | 妹は歌って歩きもだめし |
| | B | 妹はこわがらないよきもだめし |
| 冬 | A | うれしくてもう一度見る雪だるま |
| | B | 寝る前にもう一度見る雪だるま |
- (Aが正解)
(Bが正解)

まず冬・春のカード、二枚ずつ表にし、どちらが本物かを考えさせる。本物は「うれしくて」「気持ちいい」と感情をそのまま言葉にせず、その気持ちを行為で表現していることに気付かせるのである。正解だと思ふ理由を子どもたちの言葉で語らせているのもいい。最後に夏のカード、今度はAだけを表にする。「妹は歌って歩きもだめし」は正解なのか。「怖いから気持ちを紛らわすために歌っている。」「歌って歩くくらい怖いもの知らずなんだと思う。」「様々な意見が出た後、B「妹はこわがらないよきもだめし」をめぐる。子供たちは「ストリートすぎる」と直ちに却下。最後は、次項で紹介する秋の句を含めた四句から一句を選んで、作者になったつもりで句の情景や思いを綴る「なりきり作文」を作文シートに書かせる。溝越氏は子ども時代から作句の経験があり、「良い句を紹介して、どこがいいと尋ねても答えるのは難しい。今回はニセ物と比較させることで焦点を絞った」と言う。素材こそ小学生向けではあるが、「思いをストリートではなく表現する」レトリックこそが俳句の要点であることを、この授業は押さえているといっている。更に溝越

氏の授業から学ぶことは、子どもたちが積極的に授業に参加し、自ら考え言葉を繰り出していることである。高校生に対して、このような参加型の俳句の授業はできないだろうか？

溝越氏に倣って、比較の例句を考えてみた。それぞれBが正解。

- 1 A 薫風や若きことばの帆を立てよ
B 炎天に若きことばの帆を立てよ (酒井佐忠)
- 2 A 消えかかる記憶のみな沖繩忌
B 消えかかる定期のメモリ沖繩忌 (島袋 愛)
- 3 A グランドの大声援や夏兆す
B グランドの白線太し夏兆す (池田由樹)
- 4 A 待ちぼうけ時計の止まる木下闇
B 待ちぼうけ鉛噛みくだく木下闇 (日浦 碧)
- 5 A かまぐらの恋の話に盛りあがる
B かまぐらの恋の話によればれけり (下山夏葵)
- 6 A 鉛筆の先すりへりて十二月
B 鉛筆の先は鋭く十二月 (木村 聡)

比較することで、Bの、作者の発想の斬新さがよく分かる。どちらが作者の思いを具体的に示しているか、換言すれば焦点化されているかは一目瞭然である。下五の「帆をたてよ」にふさわしい季語を選択している(1)、漠然としたありきたりの連想でしかないAに

比べて、作者の視線が捉えたものや行為がくっきりと映像化されているB(2・4)、描かれた状況に動きや時間の経過を感じさせる(5)、受験が迫る時期の心情の暗喩となっている(6)等、比べることで、Bの句の持つ魅力を高校生に考えさせることができるだろう。

① 虫食い問題にして考えさせる俳句

前項で紹介した溝越氏は、比較する授業の冒頭でもう一つの手法を用いていた。教材は同じく伊藤園の「おいお茶新俳句」の子どもの部の入賞作品、秋の句「新幹線秋を○○○○走ってる」の○○○○に入る言葉を子どもたちに考えさせるといふ、いわゆる虫食い問題の手法である。何音の言葉が入るか指折りながら、子どもたちは「めざして」「ながめて」「見おろし」「見ながら」「めぐりて」等の意見を出す。正解は「真横に」。正解が分かった後は、季節を確認し、その句の情景を考えさせる。溝越氏が虫食いにした「真横に」はこの句の要であろう。紅葉した景色を真二つに分断するように猛スピードの車体が通り過ぎて行く。あるいは、秋の真っ只中を突き進んで行く、と読んでもいいかもしれない。読めば映像が浮かんで来る。子どもたちが挙げた「めざして」や「ながめて」にはない作者の感性が「真横に」という表現に凝縮されているといえる。子どもたちは、そこに入る言葉を自分で考えることで、「真横に」の見事さを実感することができる。

以前、俳人の長谷川権氏がNHKの「課外授業ようこそ先輩」に

出演した時、小学生に俳句を作らせる授業の導入として用いたのも虫食いの俳句であった。¹⁶

『こども歳時記』掲載句)、正解は「せんぶうき」である。作者は当時小学三年生の山本咲良さん。長谷川氏は「読売新聞」二〇一四年五月一日の「四季欄」でもこの句を取り上げ、〈扇風機に顔を近づけて何かしゃべると変な声になる。さすがに大人は恥ずかしくてしないが子どものころにやったことはあるだろう。作者はそれを俳句にした。しかもみんながあつと驚くような表現で。このとき小学校三年。あっぱれ〉と評している。季語の「せんぶうき」以外は皆擬音であるのがユニークである。

当然のことだが、高等学校の教科書には選ばれた名句が初めから提示されている。これを虫食いにするわけにはいかない。では、どうするか。教科書で取り上げた句と関連のある句を教科書外から探して虫食いの問題にして配付する。例えば、西東三鬼の「水枕ガバリと寒い海がある」を学習したとしよう。「水枕」と、死を連想させる凍てつく「海」がイメージの世界で一つになる。「水枕」の中の水が耳元で動いた、その音を「ガバリ」と表現したことで、この句は唯一無二のものとなっているのだが、この擬音に注目して擬音を用いた句の擬音の部分を虫食いにした問題を作るのである。

- ・寒雷や びりりびりり と真夜の玻璃 (加藤楸邨)
- ・鳥わたる ききききき と鐘切れば (秋元不死男)
- ・ きしきし と きしきし と秋の玻璃拭けば (三橋鷹女)

・ みずぶるる ぼると片のあはひかな (鎌倉佐弓)

擬態語の例句も挙げておこう。

- ・月光ほろほろ風鈴に戯れ (荻原井泉水)
- ・をりとりてはらりとおもきすすきかな (飯田蛇笏)
- ・ひらひらと月光降りぬ目割菜 (川端茅舎)
- ・ しんしん と肺碧きまで海の旅 (篠原鳳作)

これらは皆教科書に載っているような有名な句ばかりなので、宿題にせず、授業中に予告なしに配付して考えさせるといいだろう。

この虫食いの問題は、さまざまに応用できる。例えば比喩を用いた句の場合、

- ・雪降り 時間束 の降ることく (石田波郷)
 - ・朱欒割くや 歡喜 の如き色と香と (石田波郷)
 - ・ぼうたんの百のゆるるは 鬨 のやうに (森澄雄)
 - ・泣きやみて おたまじやくし のやうな眼よ (西村和子)
 - ・香水の 枕詞 のごと匂ふ (薫まどか)
 - ・白葱の ひかりの棒 をいま刻む (黒田杏子)
- 右のように比喩表現を虫食いにして、作者の感性あふれるユニークな語を得得させたものである。
- その他、

- ・ 戦争 が 廊下の奥 に立ってゐた (渡辺白泉)
- ・ じゃんけん で負けて 蜜 にうまれたの (池田澄子)

・冬深し柱の中の溝の音

(長谷川權)

「じゃんけん」「螢」どちらかを虫食いに
などその句独自の言葉を虫食いにしてもいいだろう。これらは皆、
どんな俳句がいい俳句なのかを理解するためのウォーミングアップ、
クイズ形式を採ることで、楽しみながら俳句に接する機会を増やす
狙いもある。また、自ら音数にあった言葉を考えることで、語彙力
も発想力も鍛えられる。作者の選択した語の斬新さにも気づくこと
ができるだろう。

③ 俳句の基本的なルールの確認

第一節で触れたように、高校生の俳句に対する知識は形式的なもの
で、なぜ五七五という形式になったか、なぜ季語を入れるのか、な
ぜ切れや切れ字を用いるのかについても深く理解しているとは言
ない。創作に導くためにも、基本的なルール、技法はきちんと把握
させておきたいものである。

④ 俳句誕生までの歴史

中国の「漢詩」に対して、古代の日本で生まれた詩歌を「和歌」
と呼ぶが、奈良時代後期には、その「和歌」の中に五七五七七の三
一音から成る型を持つ歌が誕生する。平安時代になると「和歌」は
貴族のたしなみとして全盛期を迎え、一人が五七五の「前句」を作
り、別の人が七七の「付句」を続けるという形（「短連歌」）、更に

それを複人数で次々と重ねていく「長連歌」が成立した。室町時
代には、貴族のものであった連歌が庶民にも拡大し、「滑稽さ（俳）
と「戯れ（諧）」といった俗な要素（諧謔・機智）が加わったもの
を「俳諧」の連歌と呼ぶようになる。江戸時代、松永貞徳によって、
「俳諧」のルールが定められ、元禄期には、「俳諧」の連歌は「連句」
と呼ばれ名が変わる。複人数で五七五と七七を重ねていく手法は以前
と同じである。また元禄期には「連句」の第一句にあたる五七五を
「発句」と呼ぶようになるが、この「発句」の独立性を高め芸術と
して完成させたのが松尾芭蕉である。その後、与謝蕪村や小林一茶
の活躍もあったが、幕末期には、「月並句会」が流行、言葉遊びに
堕してしまう。明治期になって、正岡子規は、江戸期の「月並調」
を批判、「写生」を提唱して革新に乗り出し、「発句」を独立させ
「俳句」として五七五だけで成立する形にしたのである。

以上が、ごく大まかに辿った俳句の歴史である。小中学生には必
要ないと思うが、高校生にはアウトラインは把握させておきたい。
右に述べたように現在の形の「俳句」の誕生は明治期であるが、そ
の源流は「万葉集」に収められた連歌に求められ、発句を芸術性の
あるものとして成立させた芭蕉は「俳句の祖」と呼ばれていること
ぐらいは、伝えておきたいものである。また、俳句における季語は、
松永貞徳が定めた、「発句」には必ず季節の景物（四季折々の趣あ
る事物）をいれるルールが継承されたものであることも付け加えて
おきたい。

④ 五七五音の定型、音数の数え方について

俳句がなぜ五七五音から成るのか？ これは、古代から日本人が好んだ調べ・リズムを受け継いだものであることは、右の成立史を振り返れば了解できるだろう。この五七五の音の数え方は、拗音（日本語の音節のうち、「キャ」「シュ」「チュ」のように、小さい文字で表記される音）はまとめて一音、促音、長音、撥音はそれぞれ一音で数える。音数に左右されない自由律の俳句、字余り、字足らずの俳句もあるが、まず五七五の定型が基本であることを伝えたい。

⑤ 季語について

先に述べたように、季語は江戸期のルールを継承したものであるが、一句に一季語を入れるのが基本型である。

『俳句技法入門 新版』（飯塚書店編集部編 飯塚書店 二〇一六年一月）では「季語」について次のように述べている。

〈季語の発生は古く千年以上も前から、花・月・雪・ほととぎす・紅葉など和歌の題が作られ、連歌の季題から俳諧の季題へと受けつがれ、長い歴史のなかで、庶民の生活から詩趣のあるものが選ばれ、積み重なって生み出されたもので、〈正岡子規は「季語の連想力によって、はじめて十七文字という詩の世界が、広い外界を獲得するのだ。」と言っている。〉俳句は季節の詩」と言われるが、〈季語は季節感以外にも多様な働き〉をし、作者の〈心象風景〉を代弁するだけでなく、〈普遍性、共感性、凝縮する力、融合、質量感〉（ふくらませる）などの機能〉をも持つ。俳句に季語を入れるのは、

〈決まり〉というより、〈すぐれた句〉を作るための〈必然〉なのだと言っている。大高翔氏は、〈季語には、長い歴史のなかで培われてきた美意識や人間の心情が内包されている。いわば作者と読み手をつなぐ普遍的共通イメージのようなもの〉だと言う²⁰。

従って、強い力を持つ季語を一句に二つ以上入れる（これを「季重なり」と呼ぶ）ことは、イメージを分散させて読み手に作者の意図を伝わりにくくしてしまう。「季重なり」は、どちらかの季語を別の言葉に言い替える、一句一季語と覚えさせるといいだろう。

⑥ 「句切れ」と「切れ字」について

「句切れ」（あるいは「切れ」）は、俳句独特の技法の一つで、五音、七音、五音の間のいずれかで断切（休止）することを言う。高校生には、普通の文章で句点や読点を付けて区切る箇所が、俳句では「句切れ」に当たると教えればいいかもしれない。

「句切れ」には、意味の上での断切と、リズムの上での断切があり、「句切れ」によって一七音の中に「間」ができてリズムや韻律を生み、読み手に言葉の背景を暗示、想像させる効果がある。また、「句切れ」によって分けられた二つの部分は様々な効果をもたらす。全く別のもの同士が響き合ったり、飛躍を生んだり、複雑な内容を省略したりすることもできる。

また、「句切れ」がおかれる箇所によって、上五で切れるものを「初句切れ」、中七で切れるものを「二句切れ」と言う。一句一箇所切れているものを「二句一章」、全く「句切れ」のないものを「一

「物仕立て」あるいは「一句一章」と呼ぶが、この名称はさして高校生に覚えさせなくてもいいであろう。

この「句切れ」を語る上で、なくてはならないのが「切れ字」(あるいは「切字」)である。五音、七音、五音のいずれかの終わりを「や」「かな」「けり」などの助詞、助動詞や活用語の終止形、名詞などにして、意味が切斷される語を「切れ字」と言う。代表的な「切れ字」は助詞の「や」「かな」「けり」である。この他にも「ぞ」「よ」「いかに」「らむ」などがあるが、高校生には基本の三種を覚えさせれば充分であろう。「切れ字」を用いることで、「句切れ」の位置を明確に示せるだけでなく、言葉を強調し、余情・詠嘆を伝えることもできる。

「切れ字」を用いた「句切れ」の句を例示してみよう。

・校塔に鳩多き日や卒業す (中村草田男)

切れ字「や」(助詞) 二句切れ

・芋の露連山影を正うす (飯田蛇笏)

切れ字「露」(名詞) 初句切れ

・降る雪や明治は遠くなりけり (中村草田男)

切れ字「や」「けり」(助詞) 二段切れ

最後に挙げた草田男の句は、一句に「切れ字」を二つ用いて成功した稀有な例。「切れ字」を一句に重ねて使うと、中心点が分断して俳句としてまとまらなくなることが多いという。

井上弘美氏は『俳句のルール』(井上泰至編 二〇一七年三月 笠間書院)の中で、「俳句がわずか十七音で「詩」になりうるのは

「切字」や「切れ」という表現方法を生み出したから」と言っても過言ではないと述べている。「句切れ」「切れ字」の効果は、高校生にも伝えておきたい項目の一つである。

④ 「物仕立て」と「取り合わせ」

最後に取り上げたいのは、俳句のルールではないが、手法の一つである「物仕立て」と「取り合わせ」についてである。

「物仕立て」は句切れの全くない句のことで、「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」(飯田蛇笏)、「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」(水原秋櫻子)のように一七音を一気に詠み切ったところに魅力がある。作者の率直な感情が伝わる自然体の句になる反面、初心者が詠むとありきたりの句になりがちであるという。

一方、一句の中に二つの事柄を盛り込むことを「取り合わせ」というのだが、その組み合わせた二つの要素が相乗効果を生むのである。色や質感、大きさなど、微妙に異なるものと組み合わせるのか、あるいは大差あるものを組み合わせるのかによって句の持つ印象ががらりと変わる。大高翔氏は、「取り合わせの失敗の例として「即き過ぎ」と「離れ過ぎ」がある。一つをいえばもう一つが予想されるような組み合わせが「即き過ぎ」で、二つが響き合うことのない突拍子もない組み合わせが「離れ過ぎ」だ。即かず離れず、「不即不離」が取り合わせのコツ⁴¹であると述べている。

色による「取り合わせ」の代表例は、教科書にもよく取り上げられている中村草田男の「万緑の中や吾子の齒生え初むる」である。

あふれる「緑」と吾子の齒の「白」の鮮やかな対比が自然と子供、両者の生命力を引き立たせている。河東碧梧桐の「赤い椿白い椿と落ちにけり」も大差ある色を取り合わせたインパクトの強い句である。

対象的な質感の「取り合わせ」もある。加藤楸邨の「山ざくら石の寂しき極まりぬ」はその例である。山ざくらと石の「取り合わせ」によって柔らかさと硬さ、はかなさと盤石さという対比が鮮やかなだけでなく、互いが響き合う面白さがある。

大小の「取り合わせ」もある。飯田龍太の「かたつむり甲斐も信濃も雨のなか」がその好例。かたつむりという小動物と、甲斐・信濃という大きな範囲の地域の対比なのだが、小さなかたつむりを詠み込むことで、広範囲をすっぽり雨雲が覆い、何もかもが雨の中にあるというスケールの大きさをより一層伝えていく。色の「取り合わせ」で紹介した草田男の「万緑」の句も、大自然と小さな子どもという大小の「取り合わせ」とみることもでき、二重の効果を生んでいる。三橋鷹女の「鞆は漕ぐべし愛は奪ふべし」も、子どもの遊具である鞆（ブランコ）と「愛」という掴みどころのない大人の概念の「取り合わせ」である。「奪うべし」という語の持つ不穏さと子どもの世界の無邪気さとの対比とも取れる。

このように「とりあわせ」を用いることで、句の持つ世界を大きく飛躍させ、深めることができる。俳句の重要な技法の一つとして、高校生にも理解させておきたいものである。

以上、俳句の基礎的な事項について述べてきたが、これらは俳句が一七音という、世界で最も短い定型詩であることと無関係ではない。一七音に季節感や作者の思いを込めるためにはどうしたらいいのか、その問いに応えるために、長い時間をかけて編み出された技法が、季語、句切れ（切れ字）、取り合わせに集約されていると言っている。

夏目漱石は、熊本五高の英語教師として赴任していた当時、教え子の一人であった寺田虎彦から、「俳句とは一体どんなものですか？」と質問されて、「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである。扇のかなめのような集中点を指摘し描写して、それから放散する連想の世界を暗示するものである。」と答えたそうである²²。レトリックとは文章表現の効果を高めるための技法を言う。

鳴島甫氏は『俳句による“レトリック”原点からの指導』（大修館書店 一九九四年一月）の中で、レトリック指導の注意点として、文脈を離れて個々の表現法を問題にするのではなく、文章全体が一つの統一体であるということを忘れてはならないと言う。つまり、表現効果を考える際、作品全体が考慮されていないと、形式的で上滑りなレトリック指導になるというのである。従って、作品全体をおさえることが必要になるが、それに長時間を有する小説などより、俳句や短歌の方が効率的で、レトリックを学習するには適していると述べているが、首肯できる意見である。

④ 俳句の創作指導

現行の学習指導要領において、「我が国の伝とも統と文化、とりわけ言語文化に対する理解を深めること」が国語科教育の目標の一つに掲げられていることは既に述べた。また、これまでは教師の自主的な領域で行われてきた「創作」が、国語科の内容に加えられるようになった。右の目標と学習内容の要請双方に応えるものとして、「俳句」の学習と創作は最適なものではないかと、筆者は考えている。

前節で触れたように、一七音という小さな器に収めるために、俳句はレトリックを洗練させてきた。俳句の一七音という型やさまざまなルールや技法は、高校生からすると俳句を敬遠する理由でもあるのだが、発想を転換すれば、創作する際の手がかりが豊富にあるということでもある。俳人であり、かつて公立中学校の国語科教師であった夏井いっき氏は、「有季定型」(五七五の一七音に季語を入れる)というルールが、へとても簡単に一句を生み出す仕掛けになっている」と語っている。以下、夏井氏の提唱する創作指導(『俳句の授業ができる本 創作指導ハンドブック』三浦和尚・夏井いっき編著 三省堂 二〇一一年一月)を参考にして、創作の手順を述べてみたい。

⑦ 「俳句の材料」を探す

・まず、夏井氏の言う「俳句の種」なるものを探す。はじめは、身近な自然や友人・家族、学校生活、お気に入りの音楽・食べ物・場所、思い出の出来事や風景など思いつくまま、単語を並べていく。

・次に、その中から自分の思いが盛り込めそうな単語を選び、短文にする。気取らずに自分がメールやラインで使っている言葉で書く。全く短文にできない時は、5 W 1 H (いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように行っただか)を思い浮かべて連想ゲームのようにイメージを拡げる。あるいは、五感(視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚)でどう感じたかを書き出してみる。また取り上げた語を何かに喩えたり、視点を自分以外のものにしてみたりしてもいい。自分がどう感じたかをその中に含めて書く。

・いくつかの短文ができたなら、その中で、一番伝えたいこと、一番心が動いたことから優先順位をつける。

・季語に五音を使うことを想定して、一二音でその短文をまとめてみる。

⑧ 「季語」を選ぶ

・歳時記を用いて、短文と無関係だが互いが響き合う五音の「季語」を選んで、短文と結合する。「季語」は上五、下五のいずれに置いてもかまわない。季重なりや思い込みによる季節の誤りがないように「歳時記」を使って「季語」を探す。つまり、「取り合わせ」の手法を用いるわけだが、その要点については前節で取り上げたので、ここでは繰り返さない。推敲が困難な「一物仕立て」より、高校生に指導するには「取り合わせ」の句がよいであろう。

先に季語を選定して残りの語句を考えてもよさそうであるが、夏

井氏によると、どうしても季語に引きずられて、「季語とは無関係な」という重要な条件が守れなくなるのである。この「季語とは無関係な」一二音に、他の人が思いつかないオリジナリティーのある「俳句の種」を盛り込めるかが、俳句の質に関わって来るのだと言う。

因みに、夏井氏の方法ではないが、「俳句の種」の探す際に、明治図書『新高等学校現代文B』が紹介していた写真を活用する方法もいいのではないかと思う。インスタグラム等で日常的に写真を撮っている世代には、ふさわしいかもしれない。

・息白くコントラバスに手と足と (山邊ゆりえ)

・琉金のやうなスカート春隣 (尾上恵子)

・緑蔭を走るケーキのような靴 (西村邑)

などの高校生の俳句(前掲『部活で俳句』所収)は、写真から切り取った一コマのようである。写真から発想するか、俳句が浮かんでから写真を撮るか、いずれにしても文字にするより抵抗なく「俳句の種」が得られそうな気がする。

夏井氏は「俳句の種」をメモする句帳と子ども向けの歳時記を合体した俳句創作ノートを作って、見つけた「俳句の種」をすぐ書き留める習慣をつけさせているそうだが、これは高校生にも応用できる。携帯できる小型のノートを用意し、作句のコツをまとめたポイント集や歳時記から抜粋した季語の一覧をノートの後ろに貼ってお

くといいだろう。

㊦ 句の推敲・完成

句が出来上がったら、必ず推敲を行う。音数・季語・誤字脱字をまずチェックし、声に出して読み上げてリズムが良いかどうか、助詞の遣い方や表記(漢字か平仮名か、あるいは横文字を入れるか等)はこれでいいか、語順や季語の入れ替え、違う表現への変更等を行うべきか、書き並べて句の見直しを行う。その際、文字は消さず、朱筆で添削の跡が辿れるようにしておくこと、次回の創作にも役立つ。これらのチェックポイントも俳句創作ノートの後ろに付けておくこと便利である。

㊧ 句の相互批評

全員の句が揃ったら、クラスや学年で批評会を行いたい。作者名を伏せて全員の俳句をプリントするなり、黒板等に貼るなりして、いい句だと思ふ句に投票する。その際にはどがいいと思っただか、鑑賞(批評)文も書かせ、後で発表させる。鑑賞は、句が理解できて初めて成り立つ。創作と同時に俳句に対する眼識を鍛える上でも、批評文の鍛錬の上でもぜひ実施したい。最後に、得点の多かった句の作者を明らかにして、作者の創作の狙いを語ってもらおう。俳句がもともと座の文学であったこと、読み手の自由な読みが許される余白の文学であることを考えると、互いに批評し合う場を設けることは意義があると思われる。これに慣れてきたら、「題詠」に挑戦す

るのもいい。題を与え、制限時間を設けて俳句を創作、数句を選ん
で提出、後は右の批評会と同じ展開である。「俳句甲子園」のディ
ベート方式を持ち込んでみるのも面白いかもしれない。²³

おわりに

以上、高校における俳句指導について、いくつかの提言を行った。
俳句の学習は対象を観察する眼を育て、何気なく過ごしていた日常
の中に驚き・発見があることを教えてくれる。一七音という小さい
器に、自分の発見や思いを盛り込むためには、語彙力や表現技法を
磨く必要もある。「伝統的な言語文化」を生きたものとして受け継
ぐためにも、また、教室を巣立った後も生かせる国語力を養うため
にも、俳句はもっと取り上げられていい教材なのではないだろうか。
更に、創作後の相互批評や句会を活用すれば、互いに学び合える
「対話的な学び」を深めることもできるだろう。

今回は、現場の先生方にすぐ活用していただけるように俳句の例
示を多くしたため紙面が予定より大幅に増加、俳句創作の過程の例
示、俳句を用いた文語文法の学習についても言及しなかったが、取
り上げる紙面が尽きてしまった。稿を改めたい。

なお、俳句の学習は、継続することで効果を上げる。授業で取り
上げた後も、クラスや学校図書室に歳時記や高校生による俳句の作
品集を常置する、投句箱を設置して俳句の創作を促す等の息の長い
取り組みが求められるだろう。

注記

- 1 「朝日新聞」二〇一七年四月六日 朝刊三十五面
- 2 第一学習社は大岡信氏の「折々のうた」を引用。「ぶち切らる」
「海の旅」の表記は大岡氏に拠るものであろう。
- 3 俳人の名に関しても、坪内稔典氏の俳号は「ねんてん」である。
教科書によっては「としのり」とルビのあるものもあるが、改
めるべきだろう。
- 4 桐原書店の『新探求国語総合 現代文・表現編』では、短歌や
俳句を用いた表現編活動「創作にして話し合う」を別頁で取り
上げている。
- 5 海外のハイクに関連するものとして、三省堂『現代文B改訂版』
の「広がる言葉の世界（翻訳）」と題した、芭蕉の句の翻訳の
紹介、筑摩書房『国語総合改訂版』の外国の俳句について調べ
発表する、という課題を挙げておきたい。
- 6 三省堂『明解国語総合改訂版』にも、「テーマを決め、気に入っ
た俳句を集めて自分だけの句集を作ろう」とする課題が挙げら
れている。
- 7 『別冊俳句 俳句生活一冊丸ごと俳句甲子園』（カドカワムック
351 平成二年七月）。「俳句甲子園公式作品集」は毎年刊行さ
れている。
- 8 優秀作は『17音の青春』に収録、毎年刊行されている。
- 9 「朝日新聞」（平成一六年八月六日）掲載。
- 10 「朝日新聞」（平成一六年八月一〇日）掲載。

- 11 「朝日新聞」(平成一六年八月二日) 掲載。
- 12 「朝日新聞」(平成一六年八月一九日) 掲載。
- 13 『俳句の授業・俳句の作法―どう教え、どう作るか』(国語科授業改革双書27 明治図書 一九八八年八月)
- 14 「朝日新聞」(平成二八年三月六日) 三一面 「花まる先生 公開授業」。見出しは「みんなで見抜くニセ俳句」
- 15 ここに挙げた正解の俳句のうち、1と4は「俳句甲子園」の優秀句から、4と5は『先生と子どもたちの学校俳句歳時記』(星野高士 他 監修 学芸みらい社 二〇〇二年一月) 所収の句から採った。ニセ俳句は筆者の創作。
- 16 「課外授業ようこそ先輩」著名人による母校での授業の様子を伝える番組(一九九八年四月二日～二〇一六年四月一日放映)。
長谷川氏は「心でとらえた音を俳句に」と題して出演。(二〇一四年一月二二日放映)
- 17 『ゼロから始める俳句入門』大高翔 (KALOKAWA 二〇一四年七月) を主に参照した。
- 18 『俳句技法入門 新版』(飯塚書店編集部編 飯塚書店 二〇一六年一月) では、(日本人は十二音までが無理なく一息に発音でき) (前後の五音と重なって美しいリズムを作ることができ) (一七音は日本人の呼吸にあった五音・七音の音数律) だと指摘している。
- 19 夏井いつき氏は、子どもたちに音数の数え方を覚えさせるのに春の季語の一つ「チューリップ」を用いるという。数え方が分
- 20 前掲『ゼロから始める俳句入門』
- 21 前掲『ゼロから始める俳句入門』
- 22 『夏目漱石先生の追憶』寺田虎彦(俳句講座)昭和七年(二月)句会、生徒の相互批評の実践報告として、風間重利氏の「句会授業の実践報告1 俳句創作を通じた自己表現と相互交流の可能性」(「高校教育研究」五四号 二〇〇二年一月)、鍵本有理氏の「学生の相互評価を活用した短歌・俳句指導―国語表現の一環として」(「高専教育」三五号 二〇〇二年三月)がある。
- 23 句会、生徒の相互批評の実践報告として、風間重利氏の「句会授業の実践報告1 俳句創作を通じた自己表現と相互交流の可能性」(「高校教育研究」五四号 二〇〇二年一月)、鍵本有理氏の「学生の相互評価を活用した短歌・俳句指導―国語表現の一環として」(「高専教育」三五号 二〇〇二年三月)がある。

